



志賀直哉集

日本文学全集 21



筑摩書房

日本文学全集 21 志賀直哉集

昭和四十五年十一月一日発行

著 者 志賀直哉

発行者 竹之内静雄

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一一七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社稻興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

志賀直哉集 目次

暗夜行路

或る朝

網走まで

濁つた頭

老人

母の死と新しい母

クローディアスの日記

正義派

清兵衛と瓢箪

出来事

范の犯罪

城の崎にて

五

赤西蠣太

二六

十一月三日午後の事

二七

小僧の神様

二八

焚火

二九

真鶴

三〇

雨蛙

三一

矢島柳堂

三二

山科の記憶

三三

痴情

三四

山形

三五

脊掛にて

三六

邦子

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

灰色の月

四八

創作余談

四二

山鳩

四〇

続創作余談

四六

自転車

四三

続々創作余談

四九

朝顔

四五

年譜

四六

人と文学

四五

臼井吉見

口絵写真撮影 大竹新助

志賀直哉集

で	に	所	た	そ					
ぬ	ふ	る	時	れ	私				
る	く		の	は	は				
と	利	政	葉	花	十				
	く	や	に	を	数				
ね	葉	嘆	所	見	年				
つ	を	子	の	る	前				
り	三	葉	で	め	う				
し	回	より		り	毎				
た	牧	抱		り	年				
け		や		も	朝				
け	雨	叶	は	葉	顔				
出	の	で	い	が	を				
て	掌	も	や	毒	枯				
来	で	時	う	虫	え				
る	暫	も	た	に	て				
そ	採	非	し	刺	ぬ				
れ	ん	常	て	さ	る				

朝

顔

士心大五玩

暗夜行路

武者小路実篤兄に捧ぐ

序 詞（主人公の追憶）

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病気で死に、その後二月程経つて、不意に祖父が私の前に現はれて来た、その時であつた。私の六歳の時であつた。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其処へ来て立つた。眼の落ち窪んだ、猫背の何となく見すばらしい老人だつた。私は何といふ事なくそれに反感を持つた。

老人は笑顔を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の悪意から、それををぐらかして下を向いて了つた。釣上つた口元、それを囲んだ深い皺、変に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でさう思ひながら、尚意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた。私は

妙に居堪らない氣持になつて来た。私は不意に立上つて門内へ駆け込んだ。其時、

「オイ／＼お前は謙作かネ」と老人が背後から云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立つた。振返つた私は心では用心してゐたが、首はいつか音なく点頭して了つた。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振つた。然し此うは手な物言ひが変に私を圧迫した。

老人は近寄つて来て、私の頭へ手をやり、「大きくなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解らなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近い肉親である事を既に感じてゐた。私は息苦しくなつて来た。

老人は其儘帰つて行つた。

二三日すると其老人は又やつて来た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると、何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其処には祖父の他にお榮といふ二十三歳の女が居た。

私の周囲の空氣は全く今までとは變つて居た。總てが貧乏臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に残つて居るのに、自分だけが此下品

な祖父に引きとられた事は、子供ながらに面白くなかつた。然し不公平には幼児から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起らなかつた。然しかういふ風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起るだらうと云ふ漠然とした予感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ヶ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣持になつた。

父は私に積極的につらく当る事はなかつたが、常に／＼冷たかつた。が、この事には私は余りに慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の経験としての全体だつた。私は他の同胞の同じ経験をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故、私はその事をさう悲しくは感じなかつた。

母は何方かと云へば私には邪慳だつた。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかかはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。兎に角、秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨ててあつた梯子から誰にも氣づかれずに一人、母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟伝ひに鬼瓦の処まで行つて馬乗りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな声で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い

処へ登つたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる：

間もなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の悪い程優しい調子だつた。

「あのネ、其処にちつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其処に音なしに居るのよ」

母の眼は少し釣上つて見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の来るまでに降りて了はうと思つた。そして馬乗りの儘少し後じさつた。

「ああつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしのこと。お母さんの云ふ事をよくきくのネ」

私はちつと眼を放さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出来なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は充奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急に明瞭して來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何といつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私はさう思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。

私は一人茶の間で寝ころんで居た。其処に父が帰つて来た。父は黙つて、袂から菓子かしの紙包を出し、茶簞ちだんの上に置いて出て行つた。私は寝た儘、じろ／＼それを見てゐた。父が又入つて来た。そして、今度は紙包を戸棚の奥へ仕舞ひ込んで、出て行つた。

私はむつとした。気分が急に暗くなつた。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて来た。私には我儘な氣持が無闇と込み上げて来た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。

「母さん、お菓子」

「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐたのだ。

「何か。よう、何か」

母は応じなかつた。そして、畳んだ着物を簞笥へ仕舞つて出て行かうとした。

私は起き上つて、

「よう、何か」かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は黙つて私の頬をぐいとつねつた。私は怒つて其手をピシヤリと打つた。

「もう食べたぢや、ありませんか。何です」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて帰つた菓子かしをせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシャ／＼してかなはなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。兎に角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が変へられなくなつて居た。

母は私の手を振り払つて、出て行かうとした。私は後ろから不意に母の帯へ手をかけ、ぐいと力一杯に引いた。母はよろけて障子に掴まつた。其障子がはづれた。

母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を掴み、ぐんぐん戸棚の前へ引張つて行つた。母は片腕で私の頭を抱へて置いて、いやがる私の口へ其厚切りの羊羹ようきやうを無理に押し込んだ。食ひしばつてゐる味噌みそ齒の間から、羊羹が細い棒になつて入つて来るのを感じながら、私は度胆を抜かれて、泣く事も出来なかつた。

亢奮から、母は急に泣出した。少時しばしばして私も烈しく泣出した。

根岸の家では総てが自堕落だつた。祖父は朝起きると楊子ようしをくはへて銭湯へ出かけた。そして帰ると其寢間着姿で朝餉あさぐしの膳に向つた。

来る客も変つた色々な種類の人間が来た。殊に花合戦をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて来た。大学生、それから古道具屋、それから小説家（？）、それから山上さんと皆が云つてゐる五十余の一寸未亡人らしい女な

どであつた。此女は其頃の医者が持つたやうな小さい黒革の手さげ鞆を持つて来た。それには、きまつて沢山な小銭と、一揃ひの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入つて居たさうである。然し此女は未亡人ではなく、其頃大学で歴史を教へて居た或る年寄つた教授の細君で、此女の甥が嘗てお栄と同棲して居た、その縁故で、良人に隠れて好きな遊び事の爲めに来たのだと云ふことである。其甥と云ふ男は大酒飲みで、葉巻のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、たうとう其二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺して了つたと云ふ事を私は二十年程してお栄から聞いた。

山上と云ふ女は十時頃には大概歸つて行つた。すると其頃になつて、東京者の癖に大阪弁ばかり使ふ若い寄席芸人がよく仲間へ入りに来た。

お栄は勝負には入らなかつたが、祖父の勝敗には多分實際上の氣持から、よく焦慮して口出しをして居た。さう云ふ時、いつも下品な皮肉を云つて皆を笑はせるのは其寄席芸人であつた。

後年私は、何故それ程、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたらうと、よく考へた。月々困らぬだけの金は父から来てゐたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の売り買ひをしたり、がらくた道具屋の競売に家を貸して席料を取つたりした。まうけづく以上、祖父の趣味のやうにも思へた。

お栄は普段少しも美しい女ではなかつた。然し湯上りに

濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。さう云ふ時、お栄は妙に浮き／＼とする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行歌を小声で唄つたりした。そして、酔ふと不意に私を膝へ抱き上げて、力のある太い腕で、ぢつと抱き締めたりする事があつた。私は苦しいまに、何かしら氣の遠くなるやうな快感を感じた。

私は祖父を仕舞ひまで好きになれなかつた。寧ろ嫌ひになつた。然しお栄は段々に好きになつて行つた。

根岸の家へ移つて半年余り経つた或る日曜日から祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度兄は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云ふ未だ一年にならぬ赤兒とそして父だけが家に居た。

祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、其日父は珍らしく機嫌がよかつた。父はいつにない愛想らしい事を私に云つた。父としてはそれは氣まぐれだつた。何か其日氣分のいい事があつたのかも知れない。然しそんな事は私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるやうな心持で、祖父が茶の間へ引きかへしてからも、一人其処に残つてゐた。

「どうだ、謙作。一つ角力をとらうか」父は不意にこんな事を云ひ出した。私は恐らく顔一杯に嬉しさを現はして喜んだに違ひない。そして首肯した。

「さあ、来い」父は坐つた儘、両手を出して、かまへた。

私は飛び起き様に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかつて行つた。

「中々強いぞ」と父は軽くそれを突返しながら云つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかつて行つた。

私はもう有頂天になつた。自身がどれ程強いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいと云ふより、私の氣持では自分の強さを父に感服させたい方だつた。私は突返される度に遮二無二ぶつかつて行つた。こんな事は父との關係では嘗てなかつた事だ。私は身体全体で嬉しがつた。そして、をどり上り、全身の力で立向かつた。然し父は中私のために負けては呉れなかつた。

「これなら、どうだ」かういつて父は力を入れて突返した。力一ぱいにぶつかつて行つた所には、すみを食つて、私は仰向け様に引つくりかへつた。一寸息が止まる位背中を打つた。私は少しむきになつた。而して起きかへると、尚勢込んで立向かつたが、其時私の眼に映つた父は今までの父とは、もう變つて感じられた。

「勝負はついたよ」父は亢奮した妙な笑声で云つた。

「未だだ」と私は云つた。

「よし。それなら降参と云ふまでやるか」

「降参するものか」

間もなく私は父の膝の下に組敷かれて了つた。

「これでもか」父はおさへて居る手で私の身体をゆす振つた。私は黙つて居た。

「よし。それならかうしてやる」父は私の帯を解いて、私の両の手を後手に縛つて了つた。そしてその余つた端で両方の足首を縛合せて了つた。私は動けなくなつた。

「降参と云つたら解いてやる」

私は全く親みを失つた冷たい眼で父の顔を見た。父は不意の烈しい運動から青味を帯びた一種殺氣立つた顔つきをして居た。そして父は私を其儘にして机の方に向いて了つた。

私は急に父が憎らしくなつた。息を切つて、深い呼吸をしてゐる、父の幅広い肩が見るからに憎々しかつた。其内、それを見つめてゐた視線の焦点がぼやけて来ると、私はたうとう我慢しきれなくなつて、不意に烈しく泣き出した。父は驚いて振り向いた。

「何だ、泣かなくてもいい。解いて下さいと云へばいいぢやないか。馬鹿な奴だ」

解かれても、未だ私は、なき止める事が出来なかつた。「そんな事で泣く奴があるか。もうよし／＼。彼方へ行つて何かお菓子でも貰へ。さあ早く」かう云つて父は其処にころがつて居る私を立たせた。

私は余りに明らかな惡意を持つた事が羞かしくなつた。然し何処かに未だ父を信じない氣持が私には残つて居た。

祖父と女中とが入つて来た。父は具合惡さうな笑ひをしながら、説明した。祖父は誰よりも殊更に声高く笑ひ、そして私の頭を平手で軽く叩きながら「馬鹿だな」と云つた。

第一

時任謙作の阪口に対する段々に積もつて行つた不快も阪口の今度の小説で到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中にも清々しい気持になつた。そして彼は其読み終つた雑誌を枕元へ置くのも穢らはしいやうな心持で、夜着の裾の方へ抛つて、電氣を消した。三時近かつた。

彼は矢張り興奮して居た。頭も身体も芯は疲れてゐながら中々眠る事が出来なかつた。彼は頭を転換さす為めに何か氣楽な読物を見ながら睡むくなるのを待たうと考へた。が、さう云ふ本は大概お栄の部屋へ持つて行つてあつた。彼は一寸拘泥したが、拘泥するだけ変だとも思ひ返して、再び電氣をつけて二階を降りて行つた。襖の外で、

「一寸本を貰ひに来ました」と声をかけて、「塚原ト伝は戸棚ですか」と云つた。

お栄は枕元の電燈をつけた。

「床の間か、茶簞笥の上ですよ。未だ起きてたの？」

「眠れなくなつたんで、見ながら眠るんです」

謙作は茶簞笥の上から小さい講談本を持つて、「明日」と云つて其の部屋を出た。

「御機嫌よう」かういつて、お栄は謙作が襖を締めるのを

待つて電燈を消した。

謙作は其氣楽な講談本を読みながら、朝露のやうな湿り氣を持つた雀の快活な啼声を戸外に聴いた。

翌日はどんより曇つた静かな秋の日だ。午過ぎて一時頃、彼はお栄の声で眼を覺ました。

「龍岡さんと阪口さん」

彼は返事をしなかつた。返事をするのが物憂くもあつた。が、それよりも今日阪口に会ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では甚くこんぐらかつた問題であつた。

「あちらへお通ししてよ。直ぐ起きて下さいよ」かう云つて出て行くのを、

「阪口だけ断つて下さい」と彼は云つた。

「何うして？」お栄は驚いたやうに振り返り、両手を襖に掛けた儘、立つて居た。

「ぢやあ、よろしい。二人共通して置いて下さい。直ぐ行きます」

謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小説と云ふのは、或主人公が其家にゐる十五六の女中と関係して、その女に出来た赤兒を墮胎する事を書いたものであつた。謙作はそれを多分事実だと思つた。そして其事実も彼には不愉快だったが、それをする主人公の氣持が如何にも不真面目なのに腹を立てた。事實は不愉快でも、主人公の氣持に同情出来る場合は赦せるが、阪口の場合は書く動機、態度、総てが謙作には如何にも不真面目に映つた。尚其上にそれに出て

来る主人公の友達と云ふのはどうしても自分をモデルにして居るとしか彼には考へられなかつた。其友達に対する主人公の氣持が彼を怒らした。

主人公は其女が余りに子供らしく無邪氣な爲めに誰からも疑はれないのを利用して、平氣で友達の前で其女をからかつたり、いぢめたりする事を書いて居た。お人よしで、何も氣がつかずにゐる友達がそれを書き切りに心で同情して居る。主人公は尚皮肉にそれを見抜きながら、多少苛々として、其女を泣かす事などが書いてあつた。

謙作は其女中を実際嫌ひではなかつた。如何にも無邪氣で人がよささうな点を可愛く思つた事もある。然し阪口がこれと唯の關係で居さうもない事は大概察して居た。それが阪口の小説では何も知らぬ友達が心密かに其女を恋してゐるやうに書いてあつた。そして主人公は腹に、動ともすると起つて来る嘲笑を抑へ、それを冷やかに傍觀して居る事が書いてあつた。主人公が他人の心を隅から隅まで見抜いたやうな、しかも、それが如何にも得意らしい主人公の氣持が謙作をむかむかさせた。

然しそれにしても何故今日訪ねて来たか。其雑誌が出てからもう一週間になる。其間何か自分から烈しい抗議の手紙でも来さうに思ひながら、中々来ない。其不安に却つて脅迫されて出て来たのではないかしら。それともつと性の悪い偽悪者根性から、太々しい面構へを自分に見せるつもりで来たのかも知れないと謙作は疑つた。若しかしたら

手つ取り早く、面と向かつて思ひ切り云つてやつてもいいと考へた。

謙作の考へは段々誇張されて行つた。彼は顔を洗ひながらこんな考へで興奮した。

茶の間で着物を着かへて居ると、座敷の方から二人のしてゐる話し声が聴こえて来た。二人は如何にも呑氣な調子で話して居た。謙作は何だか自分だけが鯨張つて居るやうな変な氣がした。皆が平氣で居る中に一人怒つてゐる自分が狐につままれたやうに馬鹿氣でも見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。

「昨晚はおそかつたつて？」彼が座敷へ入ると、龍岡が氣の毒したと云ふ氣持を現はして云つた。

「もう起きる頃だつたのだ」

阪口はお栄が出して置いた其日の新聞を見ながら何氣ない顔をして居た。謙作は阪口が今自分が想像してゐたやうな氣持で来たのではない事を知つた。例のだらしないさからず／＼と龍岡に誘はれて来たに違ひなかつた。それでも彼は、

「君達は何処で会つたんだ」と念の爲めに龍岡に訊いて見た。

「僕が連れ出したのさ」と龍岡は答へた。そして「此奴の今度の小説を見たかい？」と龍岡は特に「此奴」と云ふ言葉で一面或る親みをも含んだ輕蔑の流し眼を阪口へ向けながら云つた。謙作は返事をしなかつた。

「いやな小説だ。それもいいが、中に出て来る氣の利かない友達は僕をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすっかり腹を立てて、今朝起きぬけに出掛けて、怒つてやつた所だ」

阪口は新聞から眼を放さず、にや／＼笑つて居た。龍岡は一人云ひ続けた。

「大部分空想だと云ふが、怪しいものだ。阪口のやりさうな事だ」

阪口はこんなに云はれても別に不愉快な顔もしなかつた。彼の腹は解らなかつた。然し彼の行為の上の趣味から云つて、こんなに云はれながら只にや／＼してゐる事は確かに彼自身氣に入つて居るに違ひなかつた。さう云ふ所に優越を彼は示さうとして居る。又一つは龍岡が全然異ふ仕事をしてゐる所からも、その余裕を持てるらしかつた。龍岡は其年工科大学を出て発動機の研究の爲め近く仏蘭西へ行くつもりで居る。

「他人の氣持を見透したやうな書き振りが一番不愉快だと云つてやつたんだよ。たまには当る事もあるが、人間の氣持は直ぐ動いて居るから、次の瞬間にはもうそれを反省してゐるし、或る場合、同時に反対した二つの氣持を持つて居る事もある。所が阪口の書く物では主人公に都合のいい氣持だけが見られて、不都合な方には全で色盲なんだ」

「もう解つたよ。何遍繰返したつて同じ事だ」阪口も一寸不快な顔をした。

「今朝から散々油をしぼつて居るんだよ」龍岡は謙作の方を向いて多少神經的に笑つた。

「しつこい奴だ」と阪口が独語のやうに云つた。

「ええ？」龍岡もむつとして云つた。「この位の事を云はれて君に腹を立つ資格はないよ。腹を立つなら、もつと幾らでも云ふよ。君は一トかど悪者がつて居るが、悪者としてちつともなつてないぢやないか。書いたものでは相当悪者らしいが、要するに安つばい偽悪者だ。——墮胎が何だい」龍岡はつづばなすやうに云つた。彼は今まで快活らしくはしてゐたが、其実阪口のにや／＼した態度に不愉快を感じてゐたらしかつた。そして、それを破裂さした。龍岡は小柄な阪口に較べては倍もあるやうな大男で、その上柔道が三段であつた。さう云ふ点からも阪口はすつかり圧迫されて了つた。

謙作は先刻から阪口に対する自分の態度を如何決めていかわらないで居る内に龍岡がこんな風にやつて了つたので、その白けた一座をどうしていいか分らなかつた。其儘三人は黙つて居た。

「船は決つたのかい？」少時して謙作が沈黙を破つた。

「十一月十二日の船にした」

「支度はもう出来たのかい」

「別に大した支度もないからネ。——それはさうと、浮世絵を少し買つて行きたいと思ふんだが、何時か一緒に見に行つて貰へないかな。どうせさう高い物は買へないが、彼

方で世話になる人の贈物にしようと思ふんだ」

「此方もよくは解らないが、何時でもいい。行かう。然し此頃は随分高くなつたらしいよ。前の相場を知つて居ると買ふ氣がしないさうだ。若しかすると巴里で買ふ方が安い物があるかも知れないよ」

「そいつは困るな。何か別の物にするかな」

「榛原の千代紙でも持つて行つちや、どうだい。生じつかな浮世絵より子供の有家なんかは喜ぶだらう」

謙作は阪口の氣押されたやうな様子を見ると氣の毒な氣もしたが、あの作中の友達が龍岡の云ふやうに龍岡をモデルにしたものとは思へなかつた。成程書かれた場面は大概自分の知らぬ場面であつた。けれども其性格は阪口の眼に映つた自分をモデルにして居るとしか思はれなかつた。實際阪口が龍岡にさう云ふかどうかは分らないが、「場面は成程君との場面を借りた。然し性格がまるで異ふぢやないか」こんなことを云ひさうな氣が謙作にはした。謙作はこれは阪口の猜ひやり方だと思つた。若し自分が性格だけは僕をモデルにしたに違ひないと掛合つて行けば、それは同時に自身の性格を其作中の下らない人物のそれに近いものと認めることになる。寧ろ書かれた場面が實際自分との間にあつた事ならば却つて怒りいい。然し性格だけを自分に取つたらうとは云ひにくかつた。それ程に下らない人物に書いてゐる。龍岡が怒れば君をあんな性格の人間とは誰が思ふものかと云ひ、自分が怒れば、君はああ云ふ性格の人

間と自分で思つて居るのだねと云ひ兼ねない。此処に阪口の変な得意がありさうに思ふと謙作は尚腹が立つた。今の謙作は阪口に対しては極端に邪推深くなつてゐた。前に彼を信じて居ただけに、それを裏切られた今は、事々にかう云ふ邪推が浮ぶのであつた。殊に愛子との事以來、それは甚だ面白くない傾向だと知りつつも、彼は妙に他人が信じられなくなつた。今も前夜からの阪口に対する氣持を考へて、龍岡が彼自身だけがモデルにされたやうに怒つて居るのを見てさへ或疑ひを持つのであつた。

龍岡には昔氣質がある。若しかしたら作中の友達が同時に謙作をもモデルにして書かれてある事を承知の上で、故意と自身だけがモデルかのやうに云つて、阪口をやつつけたのはあるまいかと、謙作は思つた。龍岡はさうする事で一方阪口を懲し、他方で、二人の間を多少でも氣まづくなくして日本を去りたいと思つて居るのではあるまいか。それでなければ阪口をわざ／＼連出して来て、自分の前でこれ程にやつつけることが普段の彼の氣質としては少し不自然に考へられた。龍岡には短氣な性質もあつた。然し自分だけの問題に第三者のゐる前であれ程に露骨に云ふ彼とも思へなかつた。謙作には其処に何か彼の昔氣質から出た思惑がありさうにも思はれた。

二

新開地のやうな泥濘路に下品な強い光がさして居る。雨

側の家々からは鮮やかな、然し神経を疲らしてゐる者は、その為め吐気を催すかも知れない程、あくどい色の着物を着た女達が往来を通る男に叫びかけて居る。それは憐憫を乞ふやうにも、罵るやうにも聴きなされる叫声であつた。

龍岡と謙作とはもうすっかり圧倒されて了つた。二人は並んで往来の程を真直ぐに急ぎ足で歩いて居たが、それでも龍岡は小声で、

「中々綺麗な女が居るネ」などと云つた。

其日三人が赤坂福吉町の謙作の家を出たのは四時頃だつた。氣不味い感情を脱け出せずにゐる阪口は直ぐ二人と別れたがつたが、龍岡は却々彼を離さうとしなかつた。龍岡には此儘別れて了ふのは如何にも寢覚が悪いしなかつた。彼は自身が余りに云ひ過ぎた事を多少悔いてもゐる風だつた。そして三人は龍岡の千代紙を買ふつきあひをして日本橋の方へ行つたのである。

木原店の或料理屋で食事をした。謙作は殆ど飲めない方だつたが、其処を出た時には他の二人は可成りに酔つてゐた。

龍岡が突然、これから吉原見物に行きたいと云ひ出した。西洋へ行く前に見た事のない吉原を一度見て行きたいと云ふのだ。

「謙作、いいだらう？ 只見物だけだ」彼は氣兼ねをしなから謙作を顧みた。謙作も未ださう云ふ場所を知らなかつた。彼は不愛想に生返事をしたものの、心では可成り拘泥

した。さう云ふ場所には決して足を踏入れまいと云ふ程の氣はなかつた。何方かと云へば多少の興味もあつた。それ故、今龍岡にそれを云はれると冷淡を粧ひながら、妙にドキリとした。

——謙作と龍岡は電信柱の多い仲の町まで出て、其処で遅れた阪口の来るのを待つて居た。阪口は如何にも酔漢らしい様子をしながら、格子とすれ／＼に、時々何か女に串戯口をききながら歩いて居た。

「オイ、早く来ないか」と龍岡が声をかけた。「空模様が少し変になつてきた」

阪口は聴えない振りをして矢張りぶら／＼と歩いて居る。謙作は空を仰いで見た。黒い雲が建並んだ大きな建物の上に重苦しく被ひかぶさつて居た。

「俺達はもう帰るよ。一緒に帰るかい？ それとも別れるかい？」と龍岡が云つた。阪口は何か愚図々々云つて居た。そして三人は其儘其通りを大門の方へ歩いた。

ボツリ／＼雨が落ちて来た。三人は可成り疲れて居た。

結局其辺の茶屋で少し休んで行く事にした。筆太に色々な屋号を書いた行燈を出した同じやうな家が両側に軒を並べて居る。三人はいい加減に西縁と書いた、其一軒に入つた。眉毛の薄い、瘦せた四十余の女将が、寒むさうに両袖を胸の上で畳み合せ、店先に立つて、雨の降出した往来を眺めて居たが、

「どうぞ」と云つて、未だニスの香の高い洋風の段々から